

農薬の登録内容は頻りに変更されます。農薬は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpnpn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpnpn.ne.jp/osaka/>)

営農総合センター 営農指導課 (072-444-8001)



水稲

◆水管理

中干し後は、浅水・間断かんがいとす。ヒノヒカリでは8月下旬の穂ばらみ期〜出穂期にかけては水不足とならないように注意し、台風時には白穂発生防止のために、やや深水にする。

◆穂肥

穂肥は一穂もみ数の増大と登熟の向上に役立ち、多収のためには欠かせない(※ただし、ユ1コート680(16,8,10)などの元肥一発肥料を使用した場合、穂肥は必要ない)。

穂肥として太閤(12,4,12)を10a当たり30kg施用するが、穂肥は1回で全量を施用するのではなく、できれば施用量を2/3と1/3ずつ2回に分けて行なう方が効果的である。穂肥のタイミングは各々のほ場の出穂時期を予測して決める。ヒノヒカリでは、施用時期は1回だけの場合は出穂20日前に行ない、2回に分けて行なう場合は出穂25日前と15日前に施用する。

なお、穂肥は葉色が濃い場合は少なめに、やり過ぎは倒伏の原因になるので注意する。また、施用時期が遅れるともみの汚れが目立ち食味が低下する。

◆病害虫防除

もみ枯細菌病、内えい褐変病
ヒノヒカリなどの良食味米では、これらの病気で、変色米が多くなる。出穂直前に、ブラシンフロアブル(10000倍/収穫7日前まで/2回以内)等を散布する。特に出穂期前後が高湿・多雨であるともみ枯細菌病、内えい褐変病が発生しやすくなるので、出穂5日前〜出穂日に必ず薬剤を散布する。

・紋枯病、いもち病

葉にいちもちの症状が出ている場合、過繁茂で紋枯病の発生が懸念される場合には、コラトプリンパー粒剤(10a当たり3〜4kg/出穂30日前〜5日前まで/2回以内)を初発時に散布する。

・イネツトムシ、セジロウンカ(夏ウンカ)(8月上旬)

イネツトムシの幼虫による綴り葉(2〜3株に1か所以上)や夏ウンカが目立つ(10頭以上/株)場合はバダンバツサ粒剤(10a当たり3〜4kg/収穫30日前まで/5回以内/田面に均一散布)等を散布する。
*バダンバツサ粒剤は、ウンカ類で登録がある。



表1. なすの病害虫防除に登録がある農薬

病害虫名	薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布流量
アザミウマ	アドマイヤー水和剤:ネオニコチノイド系	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
	コテツフロアブル:ピロール系	2000倍	収穫前日まで/4回以内	100~300ℓ/10a
	アフファーム乳剤:マクロライド系	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
	スピノエース顆粒水和剤:スピノシン系	2500~5000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
アザミウマ	アードント水和剤:ピレスロイド系	1000倍	収穫前日まで/4回以内	150~300ℓ/10a
	コテツフロアブル:ピロール系	2000倍	収穫前日まで/4回以内	100~300ℓ/10a
	スピノエース顆粒水和剤:スピノシン系	2500~5000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
	アフファーム乳剤:マクロライド系	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
オオタバコウ	コテツフロアブル:ピロール系	2000倍	収穫前日まで/4回以内	100~300ℓ/10a
	スピノエース顆粒水和剤:スピノシン系	5000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
	フルピカフロアブル:アクリリルピリミジ系	2000~3000倍	収穫前日まで/4回以内	100~300ℓ/10a
	トリフミン乳剤:注:各品目別登録	2000倍	収穫前日まで/5回以内	100~300ℓ/10a
うどんこ病	ヘルコート水和剤:グアジン系	3000倍	収穫前日まで/3回以内	150~300ℓ/10a

*アフファーム乳剤、スピノエース顆粒水和剤はアザミウマ類で登録がある。

表2. こまつなの害虫防除に登録がある農薬

害虫名	薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布流量
コナガ	アフファーム乳剤:マクロライド系	2000倍	収穫3日前まで/2回以内	100~300ℓ/10a
	コテツフロアブル:ピロール系	2000倍	収穫3日前まで/1回	100~300ℓ/10a
	カスケード乳剤:注:各品目別登録	2000倍	収穫7日前まで/2回以内	100~300ℓ/10a
アザミウマ	センターリ顆粒水和剤:B T 剤	1000倍	発生初期ただし収穫前日まで/1回	100~300ℓ/10a
	スピノエース顆粒水和剤:スピノシン系	2500~5000倍	収穫14日前まで/2回以内	100~300ℓ/10a
ミカン	アルバリン粒剤:ネオニコチノイド系	6kg/10a	播種土壌混和は種時/1回	-
モスビラン	モスビラン顆粒水溶液:ネオニコチノイド系	4000倍	収穫7日前まで/1回	100~300ℓ/10a

*カスケード乳剤は、非結球あぶらな科葉菜類で登録がある。
*センターリ顆粒水和剤は野菜類(はくさいを除く)で登録がある。
*スピノエース顆粒水和剤は非結球あぶらな科葉菜類(みずな、長崎はくさいを除く)のヨトウムシ類で登録がある。
*アルバリン粒剤は、非結球あぶらな科葉菜類(チンゲンサイを除く)で登録がある。
*モスビラン顆粒水溶液は、非結球あぶらな科葉菜類(チンゲンサイを除く)で登録がある。

発生する場合がありますので注意し、発生すれば、表1の登録農薬で防除を行なう。
同じ系統の薬剤を続けて使うと抵抗性がついて効果が低くなるので、ローテーション散布を行なう。

キャベツ

は種床は、排水の良い場所を選び、は種後は直射日光と雨を避けるため、寒冷紗を被覆する。

本ほでは、根こぶ病の予防のため、できる限りアブラナ科野菜の連作を避け、定植14日前に石灰窒素(10a当たり100kg)を散布後土壌混和し、定植前にネビジン粉剤(10a当たり20〜30kg全面土壌混和/2回以内、

・ニカメイチュウ、コブノメイガ、トビイロウンカ(秋ウンカ)(8月下旬)
ニカメイチュウ(7月の多発田)やコブノメイガ(食害率20%以上)の被害が目立つ場合、バダンSG水溶液(15000倍/収穫21日前まで/6回以内)を散布する。また、株をはいて秋ウンカが1株に1頭以上確認されるようであれば、トレボン乳剤(10000〜20000倍/収穫14日前まで/3回以内)等を散布する。

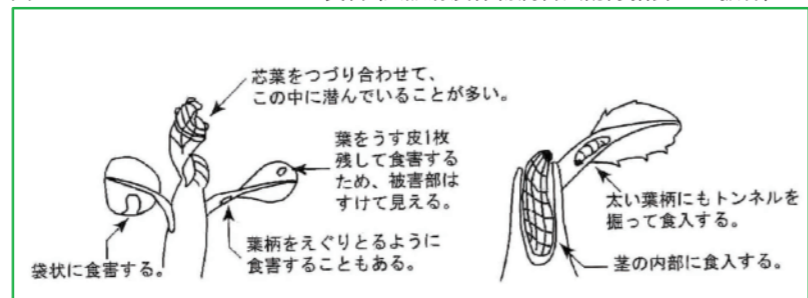
◆トレボン乳剤は、ウンカ類で登録がある。

・斑点米カメムシ類

出穂後から乳熟期にかけてカメムシ類にもみを吸汁されると斑点米の被害が出る。そのため、出穂5〜10日後にトレボン乳剤(20000倍/収穫14日前まで/3回以内)、出穂期にアルバリン粒剤(10a当たり3kg/収穫7日前まで/3回以内)等を散布する。

なお、斑点米カメムシ類は出穂前には畦畔イネ科雑草に生息し、出穂に合わせて水田に移動するので、出穂2週間前までに畦畔の草刈りを行ない、その後は雑草が繁茂しないように管理する。

図. ハイマダラノメイガによる食害(大阪府農作物病害虫防除指針より抜粋)



または10a当たり20kg作条土壌混和/2回以内)を処理する。
近年、ハイマダラノメイガ(ダイコンシンクイ)の発生が多くなっている。サンサンネット等によるトンネル被覆は害虫の侵入防止に効果が高い。
ハイマダラノメイガ防除のため、アルバリン粒剤(1株当たり3gを植穴土壌混和/定植時/1回)かアクタラ粒剤5(1株当たり2gを植穴処理/定植時/1回)を使用する。

野菜

◆水なす

露地栽培では、生育が旺盛になってくるので、側枝の切り返しせん定を行ない、V字仕立てにする。
摘葉(葉かき)は、果実の傷を防ぐとともに、株元へ日光を当て、側枝の生育を促すために行なう重要な作業である。なお、一度に多くの葉をかくと樹勢を弱めるとともに、曲がり果やつや無し果の発生を助長するので、葉かきはこまめに行なう。

◆病害虫防除

ミナミキイロアザミウマやミカンキイロアザミウマには、表1の登録農薬で防除を行なう。オオタバコガの発生が多くなる時期なので、果実に食害があれば、早期に捕殺し、果実をほ場から持ち出して処分するとともに、表1の登録農薬で防除を行なう。

半身萎ちよう病や青枯病が発生した場合、発病株から収穫はさみによって伝染するので、発病株は早期に株元から切り取り、ほ場外へ持ち出して処分する。
露地栽培でも、うどんこ病が発生する時期である。葉裏から

果樹

◆みかん

◆仕上げ摘果

隔年結果を防止するため、8月の作業は着果量の多い樹を中心に仕上げ摘果を行なう。ただし、着果量の少ない樹には果梗の太い果実(軸が太いみかん)でも品質を無視して遅くまで残し、翌春の発育枝を確保する。

◆病害虫防除

近年残暑が厳しくミカンサビダニの被害が9月に入ってから多発する傾向があり、被害が目につきたしてからの防除では手遅れである。昨年多発した園では、8月下旬にダニエモンフロアブル(4000〜6000倍/収穫7日前まで/1回)または、コロマイト水和剤(2000〜30000倍/収穫7日前まで/2回以内)を散布する。
*ダニエモンフロアブル、コロマイト水和剤は、かんきつのミカンサビダニで登録がある。

◆もも

◆礼肥の施用

主に新梢の伸びが悪かったり、葉色の薄い樹の樹勢回復をはかるため、8月中旬から下旬に10a当たり、みかん配合肥料を50

*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/使用時期/総使用回数)を表示しています。

kg施用する。

◆病害虫防除

モモハモグリガ、シンクイムシ類の防除のため、8月下旬にパーマチオン水和剤（10000倍／収穫7日前まで／6回以内）を散布する。

いちじく

◆かん水

土壌水分が少ないと果実の肥大が悪くなる。逆に多すぎたり、一度に大量にかん水したりすると裂果が多くなるだけでなく、糖度の上昇も望めない。かん水は土壌が乾きすぎないように、こまめに少量ずつ行なう。

◆熟期促進処理

エスレル10（5000～10000倍／成熟予定15日前（果実生長第2期終期）／1果当たり1回）を果面がぬれる程度に散布すると、成熟が1週間程度早くなり、有利販売、計画出荷、効率的な収穫作業に役立つ。

エスレル10の処理適期の目安は、果皮色が濃い緑色から薄い黄緑色に変わり、果頂部の目が十分赤くなって、果実を割れば中の果肉が濃い赤色になっている時期である。処理適期が外観から判断できるようにするには、果実をいくつか割って確認

*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数／使用時期／総使用回数)を表示しています。

してみる。

◆収穫

気温が高く果実が腐敗しやすいため、収穫適期の果実を見落とさないようにする。過熟果や腐敗果は園外に持ち出して、シヨウジョウバエ等が媒介する病気の伝染を防ぐ。

かき

◆へたすき果対策

へたすき果は、富有柿では受精しなかった無核果（タネが入っていないため果実の腰が低い）で発生が多いため、このような扁平果は早めに摘果する。また土壌の乾燥が続いた後、秋雨で果実の肥大が急に進むとへたすき果の発生が増えるため、土壌が乾きすぎないように定期的にかん水を行なう。



◆病害虫防除

カキノヘタムシガ(カキミガ)の防除のため、8月中旬にモスプラン顆粒水溶剤（20000～40000倍／収穫前日まで／3回以内）を散布する。
また、カメムシ類が目につきだしたらアデオオン乳剤（20000～30000倍／収穫7日前／5回以内）を散布する。

お米で健康

甘酒



冬に飲むイメージのある甘酒ですが、実は季節は「夏」。飲む点滴とも呼ばれ、食欲のない夏の栄養補給にもぴったりです。昨今のブームで甘酒はスーパーやコンビニでも手に入るようになりました。

甘酒は造り方によって「米麴甘酒」と「酒粕甘酒」の2種類に分けることができるのをご存じでしょうか。

「米麴甘酒」は、炊いたお米（おかゆ）に米麴を入れて50～60度くらいの温度で7～8時間保温しておくことで出来上がります。それに比べて「酒粕甘酒」は酒粕をお湯で溶き、お好みで砂糖を加えて一煮立ちしたら完成です。「酒粕甘酒」の方が簡単に造ることができですが、酒粕は日本酒を造ったときに作られる粕のためアルコールを含んでいます。妊婦さんやお子さん、車を運転する人は注意してください。

気になる栄養価ですが、「米麴甘酒」はお米と米麴で造られ、発酵され消化が良くなっているため、夏バテ予防の栄養補給にぴったりです。エネルギー源となるブドウ糖の他、酵素やビタ

管理栄養士・雑穀料理家 ● 柴田真希

ミンB群、食物繊維、オリゴ糖などを豊富に含みます。腸の調子を整える効果も期待できそうです。



「酒粕甘酒」は酒粕の栄養である食物繊維や豊富なアミノ酸のほか、発酵パワーである酵母と麹菌を摂取できます。これらにより血圧やコレステロールを下げる効果が期待できるほか、血流を良くして体を温めたり、肌の調子が良くなったりと女性にうれしい効果も感じられそうです。

どちらを飲むかは、期待したい効果や味（風味）、造りやすさ（手に入りやすさ）で選んでみましょう。冷たいまま飲むのも良いですが、夏であってもクーラーなどで体が冷えているときは温めて飲むのも良いでしょう。牛乳や豆乳で割ったり、すりおろしたショウガやシナモンを入れるなどのアレンジを加えても良いですね。この夏は甘酒をうまく取り入れて夏バテを防止しましょう。